令和 5 年度

県内発掘調査概要

－本調査－

発掘された「平戸往還」

南北市羅（なんぼくしてき） #19

2024

発行／長崎県埋蔵文化財センター　TEL:0920-45-4080 FAX:0920-45-4082

佐世保市

早岐瀬戸（はいきせと）遺跡

早岐川の河川改修工事に伴う早岐瀬戸遺跡の発掘調査は５年目を迎えました！

令和５年度の発掘調査では、江戸時代に平戸藩が整備した「平戸往還」とよばれる道路跡が見つかっています。道路跡の幅は 3.6m を数え、両側には雨水を排水するための石造の側溝が設けられていました。道路の使用面は硬く締まった玉砂利敷きで、その下には路盤材と思われる礫層を有する構造になっています。調査の結果、最も古い使用面は 17 世紀半ば頃と考えられ、早岐の街並みが形成され始めた頃に整備された街道であることが分かっています。また、道路の使用面は都合４面確認でき、江戸時代から明治時代にかけてくり返し補修をしながら使用されていました。

平戸往還の周辺では、江戸時代の人々が暮らしていた建物跡や生活道具などもたくさん見つかっています。江戸時代の早岐は、平戸藩有数の港町として栄えたことで知られており、出土遺物から当時の早岐の賑わいを知ることができます。

河川改修工事に伴い令和元年度から調査を続けている早岐瀬戸遺跡は、佐世保市南部の大村湾と佐世保湾を結ぶ早岐瀬戸に面する遺跡です。ここは古くから水陸の交通が集まる所で人や物の往来で賑わった場所です。現在も春には「早岐茶市」が開かれ海産物や農産物、陶磁器などが周辺の地域から集まります。遺跡周辺は江戸時代の初めに海岸を埋め立てて造られた土地で、平戸往還の宿場町として、平戸や五島方面と大村湾をつなぐ港町として栄えました。

1. 町屋の発掘調査　2. 道路の使用面

島原半島と諫早中心部をつなぐ高規格道路、通称「島原道路」の建設に伴い、令和５年度は雲仙市の北ノ園遺跡、上岡遺跡、上熊崎遺跡で本調査を行いました。

雲仙市

上岡（かみおか）遺跡

雲仙市瑞穂町の広域農道沿いから新たに発見した遺跡です。調査では、主に中世期の遺物が出土しました。中でも高級品である中国産の貿易陶磁器が複数出土しており、身分の高い人の存在が窺えます。周辺の遺跡には、岡城（夏峰城）跡といった南北朝時代の城跡があることから、上岡遺跡付近にも何か関係のある施設があったのかもしれません。

中世期の遺物（中国産）

雲仙市

上熊崎（かみくまさき）遺跡

上熊崎遺跡は大木場川の中流左岸にあります。調査では川の流れにより土砂が溜り、やがて耕作地へと発展していった状況を確認しました。土砂の中から縄文時代の土器や石斧が出土したほか、弥生時代から古代にかけての土器が含まれていたことから、川の上流には縄文時代から古代にかけての人々が生活していた痕跡が残っているかもしれません。

▲ 出土した土器片 と石器

ドングリ出土状況

出土したドングリ

雲仙市

北ノ園（きたのその）遺跡

北ノ園遺跡では、縄文時代から江戸時代にかけての遺物が見つかっています。その中でも特に目を引くのが青磁や白磁といった当時の中国で作られた陶磁器の量で、近くに役所のような公的な施設があった可能性があります。その他、縄文時代の異形石器（いけいせっき）も見つかっています。

遺構では、中世頃とみられる石積みの水路や、時代不明のドングリの貯蔵穴が見つかっています。

なにこれ!?

珍しい出土品！

異形石器

青磁

写真：中世頃とみられる石積みの水路

令和５年度　県内発掘調査概要 －試掘・範囲確認調査－

試掘・範囲確認調査
遺跡の有無や規模・内容・範囲を調べる部分的な発掘調査のこと

（仮称）長尾佐遺跡

島原市・雲仙市
島原道路関係

島原半島と諫早中心部をつなぐ高規格道路、通称「島原道路」の建設に伴い、平成 30 年度から試掘・範囲確認調査を実施しています。

倉子遺跡　遺物出土状況

令和５年度の試掘･範囲確認調査は、雲仙市で（仮称）平野高野遺跡･（仮称）樋ノ迫遺跡・（仮称）迫遺跡・（仮称）長尾佐遺跡・倉子遺跡・乙宮遺跡隣接地の６か所、島原市で稗田原遺跡・（仮称）弥左ェ門高野遺跡・灰ノ久保遺跡の３か所、計９か所行いました。

このうち、雲仙市の倉子遺跡では縄文時代早期（約 10,000 ～ 8,000 年前）の土器片が出土しました。（仮称）樋ノ迫遺跡では川の跡から古代（約 1,300 年前）の土師器片や須恵器片が出土しました。乙宮遺跡隣接地では多数のピットが見つかり、掘立柱建物跡の可能性があります。

また、島原市の稗田原遺跡では縄文時代後期（約 4,400 ～ 3,200 年前）の土器片が出土しました。

乙宮遺跡隣接地

乙宮遺跡隣接地

稗田原遺跡

（仮称）長尾佐遺跡

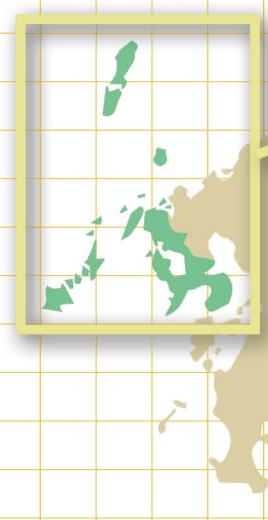
（仮称）樋ノ迫遺跡

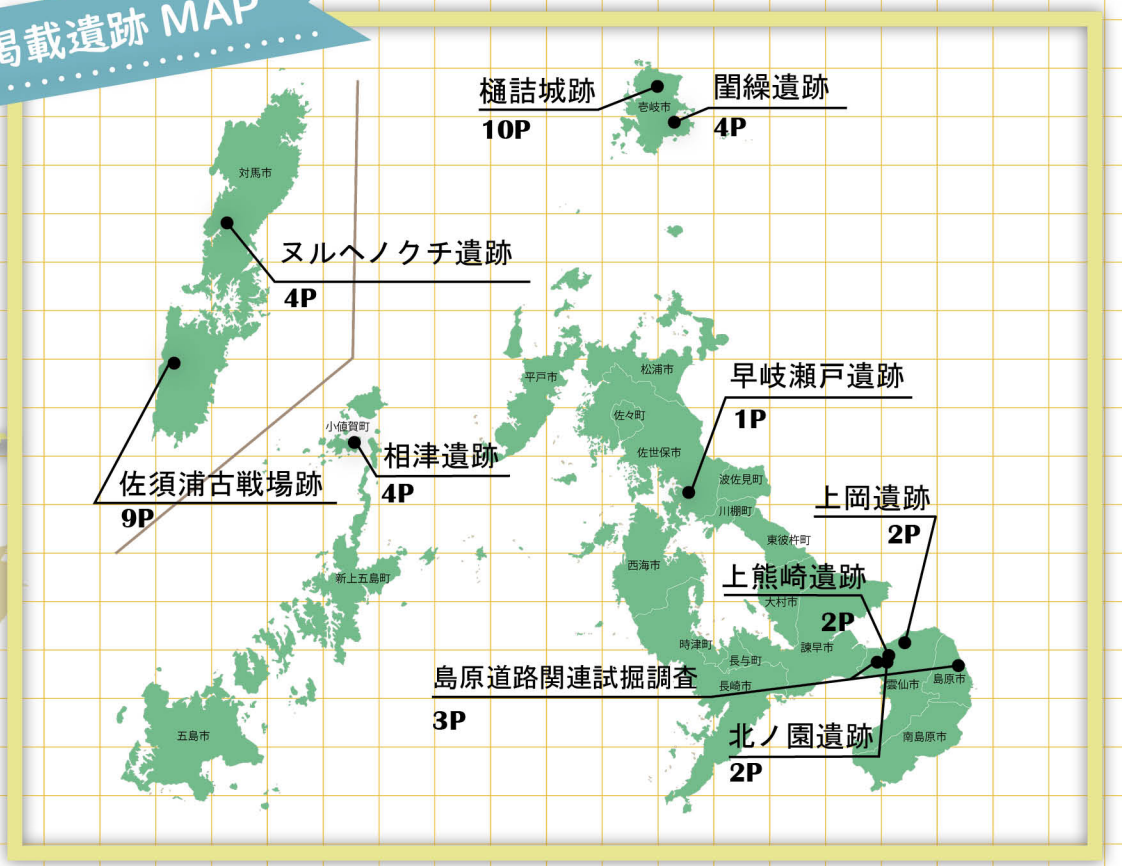
倉子遺跡

守山大塚古墳遠景

（仮称）弥左ェ門高野遺跡

掲載遺跡 MAP





「しまの遺跡の魅力」探求！

令和 5 年度には、「しまの遺跡の魅力」探求事業として、閨繰遺跡（原の辻遺跡）（壱岐市芦辺町）、相津遺跡（北松浦郡小値賀町前方郷）、ヌルヘノクチ遺跡（対馬市峰町三根）の発掘調査を行いました。

原の辻遺跡（閨繰遺跡）
令和 5 年度 調査成果

袋状口縁壺 / 閨繰遺跡（壱岐市）

原の辻遺跡（閨繰遺跡）の発掘調査を、11 月 27 日から 12 月 26 日にかけて実施しました。北から南に下る緩斜面に位置する調査地は元々饅頭畑（まんじゅうばたけ）で、現在は上下 2 段の畑になっています。令和 3、4 年度の調査により、上段の畑から弥生時代の甕棺墓や中世の柱の跡などが確認されたことを受け、令和 5 年度は下段の畑の調査を行いました。その結果、小土坑などの遺構がほとんど設けられない場所であることが分かりました。しかし遺物の出土量は比較的多く、袋状口縁壺という弥生時代中期に特徴的な土器や、旧石器時代の台形石器も見つけることができました。調査期間中には、合同発掘調査として釜山博物館の申東昭氏が 5 日間参加され、有意義な学術交流ができました。

調査風景

台形石器

釜山博物館 申東昭氏

相津遺跡

甕棺検出状況

相津遺跡航空写真

石鎌検出状況

相津遺跡は、小値賀島の東海岸沿いの扇状台地に位置します。過去には昭和 52 年に、殿寺遺跡として、弥生時代の甕棺墓 6 基と石棺墓 1 基が見つかったことで知られており、今回は弥生時代の人々が、どこでどのような暮らしをしていたのか解明するために、発掘調査を実施しました。

その結果、石鎌（穀物の収穫具）の可能性がある石器が発見されたことから、小値賀島では農耕が行われた可能性が出てきました。また、当時の子供のお墓（甕棺墓）が見つかりましたが、使われている甕は、遠賀川以東系と呼ばれる現在の北九州辺りの土器で、これまでで最西端から見つかった例として大変重要な発見です。

ヌルヘノクチ遺跡

現地説明会風景

出土したガラス小玉

ヌルヘノクチ遺跡は三根湾に注ぐ三根川の左岸に位置します。2 年目の今回は、「① 28 ㎡（4m × 7m）の範囲確認調査」と「②昨年度掘削できなかった場所の試掘調査」を行いました。その結果、①では遺物包含層が緩やかな斜面に堆積している状況が確認され、古墳時代前期の土器やガラス小玉 1 点が見つかりました。②では、残念ながら、削平により遺跡は残存していないことがわかりました。竪穴建物は見つかりませんでしたが、遺物の出土状況から、集落は今回の調査区に極めて近い可能性が考えられます。また昨年度の調査と同じく、三韓系土器が検出されたことも注目されます。

「ドローンによる遠景撮影」平戸市（大野町）

水中文化遺産保存活用推進事業

四方を海に囲まれた長崎県には、海のなかにもたくさんの遺跡があることが知られています。水中遺跡は、本県の歴史や文化をよりよく理解するための貴重な遺跡ですので、令和3年度からこれらの分布調査や保護の担い手育成に取り組んでいます。

－県内水中遺跡分布調査－

「弥生土器片採集」松浦市（籾ノ浦）

長崎県埋蔵文化財センターでは、令和3年度から県内水中遺跡の分布調査を実施しています。令和5年度は、佐世保市・松浦市・平戸市での陸上踏査を実施しました。

調査では、沿岸部を歩きながら、遺構や遺物がないか、どのような範囲で広がっているかを確認し、黒曜石製石器や弥生土器片、中世の貿易陶磁器などを確認できました。

水中遺跡を知る・楽しむ

わくわく!! 水中文化遺産！

わくわく !! 体験講座

講座の様子

集合写真

令和5年8月23日（水）から25日（金）までの3日間、水中考古学の聖地・松浦市鷹島で「令和5年度　わくわく !! 水中考古学体験講座　in　鷹島」を実施しました。全国から水中考古学に興味をもった大学生や、今後水中遺跡の調査を実施していく自治体専門職員等が鷹島に参集し参加されました。

今年度は現地参加20名、オンライン参加15名の計35名が参加され、各講座の後の質疑応答では多くの質問が飛び交い、グループディスカッションでは他大学、他分野の参加者と交流を深められ、まさに「わくわく！」の3日間でした！

壱岐高生の研究発表

埋蔵文化財センターでは、平成29年度から奈良大学が主催する「全国高校生歴史フォーラム」に、壱岐高校東アジア歴史・中国語コースの歴史学専攻生が研究論文を応募する取組を支援しています。

壱岐高校東アジア歴史・中国語コースでは、毎年、歴史専攻の2年生が奈良大学高校生歴史フォーラムなどへ論文を応募しており、長崎県埋蔵文化財センターでは教育支援の一つとして論文作成の支援を行っています。

令和5年度の2年生は戦国時代に興味があり、勝本城跡の見学をした際に本丸大手の虎口がなぜこんなに大きいのかと疑問を持ったことから、西北九州の同時期の城（織豊系城郭）の本丸虎口の大きさを計測・比較しました。また、勝本城の築城経緯から、豊臣秀吉が朝鮮を攻めた文禄・慶長の役に関する記録も調べ、虎口の大きさの理由について考察しました。

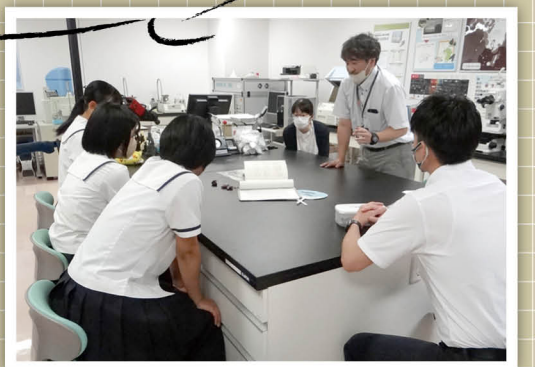
奈良大学のフォーラムでは応募総数89編のうち上位10編にあたる佳作を、徳島県立鳥居龍造記念博物館で行われた鳥居龍造記念全国高校生歴史文化フォーラムでは上位4編にあたる優秀賞を受賞しました。

勝本城跡（壱岐市）

生池城跡（壱岐市）

山城を歩いて戦国時代を実感！

島嶼部地域の高校における授業支援



センター機器を利用した黒曜石の分析（上五島高校）

宇久島資料館での遺物説明（宇久高校）

長崎県埋蔵文化財センターでは、令和4年度から、壱岐高校だけでなく長崎県内の島嶼部にある対馬・五島地域の高校においても授業支援を行っています。

令和5年度は、五島地域の五島南高校・宇久高校で、地域の埋蔵文化財についての概説を中心とした出前授業を実施しました。地元の埋蔵文化財や歴史について知るきっかけになればと思います。

また、令和4年度に出前授業を行った上五島高校では、生徒たちが校内にある遺跡から出土した黒曜石について研究を進めており、8月には埋蔵文化財センターの機器を利用して黒曜石の産地の分析を行いました。

巡回遺跡展会場「対馬博物館」

1. 講演会の様子（福岡大学名誉教授武末純一先生）
2. 巡回遺跡展展示風景

令和５年度

長崎県埋蔵文化財センター 巡回遺跡展・講演会

令和５年度長崎県埋蔵文化財センター巡回遺跡展・講演会「煌々（きらぎら）しき境界の島－外交と交易と祈りの青銅器－」を、２月３日（土）から２月25日（日）にかけて、対馬博物館にて開催しました。

巡回遺跡展では、対馬で出土した青銅器がどこからどのような理由で持ち込まれたのかを示すために、出土遺跡ごとではなく「外交（中国）」、「交易（朝鮮半島）」、「祈り（日本）」という項目にわけて展示を行いました。普段は市内３か所の資料館に分散している青銅器が一堂に会するのは、対馬でも初めてのことだったようです。

また、最終日の２月25日には、対馬市交流センターにおいて講演会を実施し、当センターの白石主任文化財保護主事による弥生時代・青銅器の概説の後、福岡大学名誉教授の武末純一先生に壱岐・対馬の青銅器の内容やそのあり方についてご講演いただきました。講演会の最後には、当センターが支援を行っている壱岐高校東アジア歴史・中国語コース歴史専攻３年生・２年生の研究発表も行いました。講演会後には対馬博物館に移動し、武末先生によるギャラリートークも行われました。銅矛の中子など、普段博物館ではなかなか注目されない部分まで解説をいただき、参加された皆様は熱心に耳を傾けていました。

釜山博物館との共同研究

長崎県埋蔵文化財センターと韓国釜山博物館は、平成27年５月から友好機関協定を結び、共同研究を実施しています。これまでは例年「東アジア国際シンポジウム」を実施してきましたが、事業の新しい展開として、職員を相互に派遣する「合同発掘調査」と、研究成果の「研究論集への掲載」を実施することになりました。

令和５年度は、「土師器系土器（はじきけいどき）」という、３世紀後半から５世紀（日本では古墳時代前期から中期）にかけて韓国嶺南地域において見られる土器を共同研究の対象としました。その理由は、日本列島の土師器との関連が強く見出される土器で、この土器の変遷を調べることで、当時の日韓交流を、より詳しく知ることが期待されるからです。また、過去の調査により土師器系土器の出土が見込まれる、釜山市古村里古墳群（こそんりこふんぐん）において、釜山博物館から合同発掘調査が提案されていたため、両機関が「土師器系土器」について相互に理解を深めることが大変有意義と考えられたからです。

合同発掘調査は、古村里古墳群において、令和５年９月４日から８日にかけて実施されました。木槨墓（もっかくぼ）の一部を調査することができ、５世紀代の陶質土器を見つけることができました。

その後、釜山博物館による入念な調査が続けられ、木槨墓（もっかくぼ）31基、石槨墓（せっかくぼ）４基、甕棺墓（かめかんぼ）３基を発見するという大きな成果が得られています。ただし、期待された土師器系土器は見つかりませんでした。

そこで共同研究として、最近韓国では初めて出土が確認された脚付三連壺（きゃくつきさんれんこ）という土師器系土器を研究対象とすることとし、その成果を両機関の研究論集へ掲載させることができました。また、令和６年１月21日には、一支国博物館特別講座において「海を渡った青銅器－長崎県埋蔵文化財センター・釜山博物館共同研究成果発表－」と題して、共同研究の成果を発表しました。

出土品の保存処理

令和5年度

発掘調査では土器や石器、陶磁器をはじめとしてさまざまなモノが出土します。その中には木製品や金属製品のような非常にもろいモノもあり、埋蔵文化財センターではそれらの保存処理を行っています。

令和5年度は878点の資料に対して保存処理を実施しました！

その中から島原市･寺中A遺跡出土の「袋状鉄斧」と、佐世保市・早岐瀬戸遺跡出土の「天保通寶」をご紹介します。

島原市　寺中A遺跡出土「袋状鉄斧」

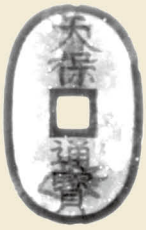
【処理前】

【透過X線画像】

【処理後】

佐世保市　早岐瀬戸遺跡出土「天保通寶」

【処理前】



【透過X線画像】

【処理後】

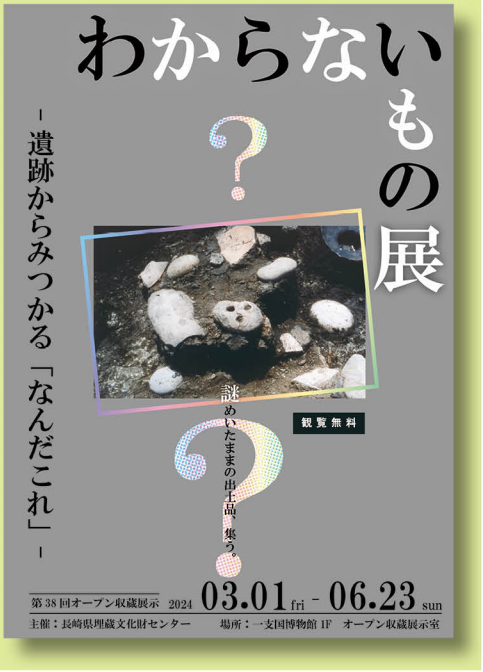
処理工程は、顕微鏡観察や透過X線撮影等の事前調査を実施したのち、精密グラインダーや解剖用メスを用いた錆取り作業⇒脱塩処理（銅製品はBTA（ベンゾ・トリ・アゾール）処理）⇒アクリル樹脂含浸強化処理となります。

このように、出土品の材質や状態を調べ、機器や薬品を使って貴重な文化財を長く残すための処理を施し、展示等で活用できる状態にしています。

オープン収蔵展示紹介

令和5年度のオープン収蔵展示は、県内の遺跡から出土した「動物の骨」を中心に、人と動物たちの歴史を紹介する『ほねほね!?MAIBUN動物らんど　～遺跡のなかのさまざまな動物たち～』、最新の調査成果と県内の洞窟遺跡を紹介する『THE洞窟展　－長崎県の洞窟遺跡－』を開催しました。

現在は、長崎県埋蔵文化財センター収蔵品の中から、用途不明のものや、保存処理などを経てわかったもの、最新調査成果を含めこれからの研究が期待されるものを紹介する『わからないもの展　－遺跡からみつかる「なんだこれ」－』を開催中です。



開催中！

2024年
3月1日（金）－ 6月23日（日）
一支国博物館1階・オープン収蔵展示室

わがまちの元寇

長崎県教育庁学芸文化課は、蒙古襲来「文永の役」750周年を前に、『「蒙古襲来」の痕跡を探る－水中と陸上からのアプローチ－』というテーマで、蒙古襲来に関わる種々の資料を収集・調査し公開する事業を始めました。その中で壱岐・対馬における発掘調査を当センターが実施しました。

対馬

出土した遺物

対馬では、文永の役において「小茂田浜（こもだはま）の戦い」があったとされる下対馬西岸の佐須川下流域を対象とし、戦いにより甚大な被害があったと考えられる集落遺跡の探索を調査目的としました。当時の海岸線は現在の小茂田浜よりも大きく内陸側に入り込んでおり、その近くに平地が開ける下原地区と樫根地区の２地区を選びました。

地区ごとに２地点ずつ、計４地点の発掘調査を実施し、うち下原第１遺跡と仮称した地点で遺物等の出土がありました。この遺跡は、小規模な扇状地の扇頂右岸にあたる平場に立地し、龍泉寺というお寺の麓の休耕地となっています。

発掘調査の結果、古代から中世に造成されたと考えられる堆積層を確認しました。層中からは、古代から中世にわたる遺物が出土し、須恵器・土師質土器・瓦器や朝鮮産陶磁器（無釉陶器・高麗青磁・粉青沙器）・中国産磁器（青磁・白磁）・石製品（滑石鍋片・砥石）・青銅製品（箸か）が確認できました。

また、室町時代頃の焼土（火を受けて焼けた土）が検出され、濃度の濃い２か所が認められました。２か所は２・２ｍほど離れており柱穴の可能性が考えられましたが、掘り込みや柱の痕跡等は見付かりませんでした。ほか、層中には微細な炭化物が多く含まれており、年代測定の結果、古代（奈良・平安時代）・中世（鎌倉・室町時代）の年代を示しました。

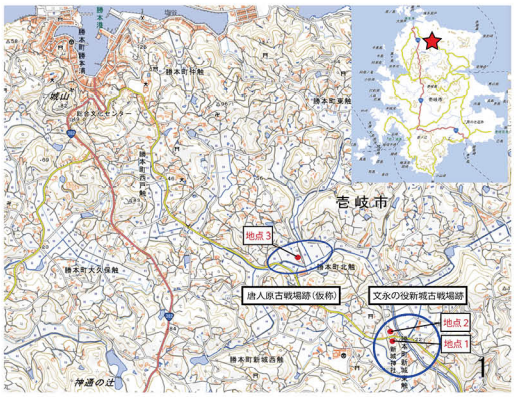
戦いの直接的な痕跡こそ見付かりませんでしたが、文永の役と同時期の遺物を含む複数時代にわたって形成された遺跡が新たに発見されたことは大きな成果であったと言えます。

中世の焼土（右側上段）と古代のピット（左側下段）

調査地

1. 調査地位置図
2. 平景隆公の墓
3. 空堀と盛土の境目（南から）

3



1

壱岐

2

7月18日から8月4日の3週間、壱岐島内の激戦地である樋詰城跡（地点1）と、文永の役新城古戦場跡（地点2）、唐人原古戦場跡（仮称）（地点3）で発掘調査を実施しました。ここでは樋詰城跡（地点1）の調査成果について紹介します。

文永の役新城古戦場跡の樋詰城は、文永11年（1274年）10月15日、元軍との死闘を繰り広げた守護代平景隆ら百余騎が、後退しついに攻め落とされて全滅したと伝わる場所です。明治19年に新城神社となり大正5年に現在の本殿が建てられたという記録が残っており、新城神社となる前から上下2段に分かれる地形が、江戸時代の終わりごろ（1861年）に描かれた壱岐名勝図誌の絵図に描かれています。上段はおそらく社殿を建てる工事の際に大きく削られていました。時期不明の遺構や遺物が確認されていますので、今後詳細に検討する予定です。下段では、壱岐高校の生徒18名と先生方の協力により調査を行い、空堀（敵が城へ攻め入るのを防ぐ堀）の一部を発見することができました。これにより主郭を丸く囲む空堀を持つという樋詰城跡の構造を明らかにすることができました。これが鎌倉時代の文永の役と関係があるものかどうかは、今後検討を進めたいと考えています。

壱岐高校生発掘調査参加状況

この調査によって元寇（文永の役）の直接の痕跡を見つけることはできませんでしたが、重要なことは、そうした痕跡が今回の調査で見つかったかどうかではなく、文永の役最大の激戦地と伝わる伝承地に対して、発掘調査という手法によって検討を行ったことにあります。この調査の紹介とともに、このような地下に眠る情報を、地道に集めていくことに、埋蔵文化財の発掘調査の意義があることを強調したいと思います。